

平成22年 5月24日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320033

研究課題名（和文） 日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究

研究課題名（英文） Research on Wood Types and Material Selection for Japanese Wooden Statues of the Ancient Period

研究代表者

金子 啓明（KANEKO HIROAKI）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・特任研究員

研究者番号：90110098

研究代表者の専門分野：日本彫刻史

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：美術史・木彫像・樹種・用材観

1. 研究計画の概要

本研究は、木彫像に用いられる樹種を科学的に分析し同定する作業をおこない、その成果を踏まえながら、樹種選択のあり方を究明しつつ、「用材観」という従来ほとんど議論されてこなかった視点から日本彫刻史を再検討することを目的としている。8・9世紀の主要な木彫像の用材がカヤであることがこれまでの本研究によって科学的に判明し、従来ヒノキ中心に把握されていた用材観に対して問題提起を行なうことができた。その作業を継続するとともに、仏教彫刻のほか神像彫刻や、中国の木彫像にも調査の範囲を広げる。

2. 研究の進捗状況

神像彫刻を中心に、仏教彫刻も含めて美術史的調査や、使用木材の樹種同定を実施した。主な調査対象地域は、熊本県、宮崎県、岐阜県、島根県である。これらの地域の作品については、一箇所にも多くの神像彫刻が伝来するものを中心に選んだ。それらは、製作年代に幅があり、また、神像彫刻と仏教彫刻の両方が含まれるものもあるので、表現や用材の地域性や時期による変遷などを知る手がかりになる。それらのほかに、京都・松尾大社の三神像（重文）、奈良・薬師寺の八幡三神像（国宝）、和歌山・熊野速玉大社の三神像（国宝）などの日本彫刻史上の重要作品についても調査を実施した。これらの作品は、その製作時代を代表するもので、表現や用材選択の意識を考える上で基準的なものであり、

前記地方作品の表現や用材選択の意識などを考察する上で欠くことができない。

調査の際には作品の彫刻史的な調書の作成、写真撮影、樹種同定のためのサンプルの採取を実施した。調査件数は約130件である。調書、写真は研究に容易に用いられるように整理をした。サンプルは、森林総合研究所において分析し樹種の同定をした。なお、採取は、所蔵者・保管者の許可を得たものに限った。一部のサンプルについては、加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)による分析を行った。その結果は、美術史的な作品の年代観とは大きな開きがあるものがある。今後、その理由について検討する必要があるが、そのためにもより多く対象を分析する必要がある。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

これまでに、神像彫刻を中心に約130件の彫刻の調査を実施した。神像彫刻は、一般に公開されることがないなかで、これだけの調査を実施したことは特記すべきことである。中国製の彫刻については、十分に実施していないので、さらに調査対象を増やす必要がある。

4. 今後の研究の推進方策

引き続き調査を実施するが、中国の木彫像、10～11世紀の木彫像に関連する従来の研究書や研究論文を外国の文献も視野に入れながら収集し、研究史を十分に把握するように

つとめる。また、対象となる木彫像の樹種や用材観に関する文献史料を渉猟し、用材に関する認識がどのようなものであったかという観点から検討を加える。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 金子啓明・岩佐光晴・能代修一・藤井智之、日本古代における木彫像の樹種と用材観Ⅲ一八・九世紀を中心に、MUSEUM、625、2010年、pp.61-79、査読有
- ② 金子啓明、日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究、『木の文化と科学』(海青社)、2009年、p.p.91-104、査読無